様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：24402
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21720071
研究課題名（和文）淡路人形座と大坂浄瑠璃界の交流に関する研究

研究課題名（英文）Research in the Transactions of Edo period Awaji Puppet Theatre Troupes and the Osaka Jōruri Scene

研究代表者
久堀　裕朗（KUBORI HIROAKI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50335402

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸時代に隆盛を極めた人形浄瑠璃という芸能を日本近世史の中に正しく位置づけるために、不可欠な要素として、新たに淡路の人形座（江戸時代、大坂初演の作品を携えて地方を巡業したプロの人形浄瑠璃劇団。十八世紀以降、淡路島内に常に二十程度の座があり、仲間組織をつくって連帯しつつ活動した。）の興行活動を本格的に取り上げ、大坂の人形浄瑠璃興行界の動向と関連づけて分析したものである。

研究成果の概要（英文）：Seeking to evaluate the proper historical place and significance of the jōruri puppet theatre, a performance form that reached its height of glory in the Edo period, this study focuses on examining anew the indispensable constituent of performance activities by Awaji puppet theatre troupes, analyzing how these connect with movements in contemporary puppet theatre on Osaka stages. (In the Edo period, professional itinerant Awaji puppet theatre troupes brought Osaka premieres to the provinces, and after the 18th century the island of Awaji maintained more than 20 troupes that interacted and formed a guild.)

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近世文学・人形浄瑠璃・文楽・淡路座

１．研究開始当初の背景

2001 年『伝統芸能淡路人形浄瑠璃』（兵庫県三原町教育委員会）が公刊され、淡路の人形座（以下、「淡路座」と略称）の人形浄瑠璃に関する従来の研究はそこに集約された。同書にも述べられる如く、江戸時代を通じて淡路座の活動は非常に広範で、大坂を中心とする中央の演者とも盛んに交流し、その影響は極めて大きかった。しかしながら、従来は資料の不足からか、研究者に正面から取り上げられることが少なく、そのことは例えば『岩波講座 歌舞伎・文楽』(1997～1998 年刊)

に淡路座に関するまとまった記載が盛り込まれていないという事実にも端的にあらわれている。そうした現状を踏まえ、先だって科研費研究課題「淡路座を中心とする近世地方人形浄瑠璃芝居の、興行と上演作品に関する研究」(2004～2006 年度、若手研究 B) に取り組み、資料調査を中心に淡路座独自の人形浄瑠璃作品についても考察を進めた。その過程で、淡路座と大坂浄瑠璃界の関係が予想以上に緊密で、人形浄瑠璃史における淡路座の役割が決して無視できるものではないことを再認識した。例えば、大坂で初演時に未完のまま上演された『生写朝顔話』(天保 3 年、大坂稲荷社内芝居初演) が、先に淡路座において増補完成のうえ上演され、それが逆に利用されて都市で正本が刊行されているといった事例が確認できた。この例からは、大坂で初演された作品が淡路座によって地方に伝播するという一方的な関係ではなく、両者には双方向の影響関係があったことがわかるのである。そこで、これまでの研究成果を土台に、新たに淡路座と大坂浄瑠璃界との交流を多角的に検証し、人形浄瑠璃史における淡路座の位置付けを更に明確化していきたいと思い至った次第である。当該研究は単に当時の興行形態の問題にとどまらず、人形浄瑠璃という芸能の本質に関わる問題を扱うものである。

２．研究の目的

本研究では、以下の三点にわたって分析を加えることを目的とする。

(1)興行記録の整理、演者レベルの交流の解明

まず、大坂の太夫・三味線・人形遣いが淡路座に加わって活動した状況をできる限り詳細に把握する必要がある。そのためにこれまでの研究でも淡路座の興行記録の調査に努めてきたが、これを継続して記録を整理することが研究目的の一つである。本研究開始段階では、阿波の『元木家記録』を原本に当たって再調査（「『元木家記録』の淡路座興行記録」、2006 年）を済ませたほか、徳島県立文書館寄託酒井家文書を調査し、そこに含まれる近世後期の淡路座興行記録をおおよそまとめ終えたところである。その他、先行研究を参考に、紀州田辺藩の記録や大分府内藩の記録から淡路座の興行記録を網羅的に確認している。本研究においても、より広範囲に資料を博捜し、淡路座による興行の足跡を見出していくことを目指す。それと共に既知の資料による分析も必要であるから、『染太夫一代記』『竹本弥太夫日記』『増補浄瑠璃大系図』等、淡路座に関する記載がある資料などを活用し、新出興行記録の情報とつき合わせ、最終的に演者レベルの交流状況について把握していく。

(2)上演テキストの相互影響関係の解明

上に『生写朝顔話』の例を挙げたが、こうした事例は更に見出しうるものと思われる。それにつき作品研究の前提として、これまでの研究の中で、淡路座旧蔵浄瑠璃本の調査を続けてきた。幸い 2003 年には南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館に新見貫次氏（淡路人形浄瑠璃に関する最初の実証的研究書『淡路の人形芝居』の著者）旧蔵浄瑠璃本が一括寄託され、私もその整理に加わって、同館ではそれを機に 2005 年 4 月、館蔵の浄瑠璃本目録が刊行された。その他、淡路座旧蔵浄瑠璃本の所蔵機関としては、兵庫県立歴史博物館（淡路源之丞座旧蔵本)、松茂町人形浄瑠璃芝居資料館（小林六太夫座・吉田伝次郎座ほか旧蔵本）があり、これまでにそれらの機関における資料所蔵状況については概ね把握できた。そこでこれまで確認した資料を基に、引き続き作品研究を進めていく。淡路座旧蔵本を用いた作品研究によって、どのような大坂初演の作品が淡路座で伝承されたのか、場合によってはどのように改作されたのかが明らかになるからである。

(3)淡路の座本と大坂浄瑠璃界の接点の解明

最後に、以上に述べた演者レベル、作品レベルの研究に基づき、大坂と淡路座間の繋がりが具体的にどのような様態でなされたのかを明らかにしていくことが大きな課題である。これについても新たな資料を探しながら検討していかなければならないが、幸い淡路の座本の中心的存在である上村源之丞座の旧蔵資料（引田家資料）が、九州に移っていた引田家から淡路人形浄瑠璃資料館に里帰りを果たし、「上村源之丞展」(2007 年 6 月 20 日～8 月 19 日)として特別展が開かれた。私も展示品の選定や解説文執筆に協力したが、同資料に含まれる座本関連文書は淡路の座本仲間組織の活動を知る上での最重要資料である。2009 年には同館に正式に寄託されたので、これを積極的に活用して分析を進める。

３．研究の方法

「研究の目的」欄に示した三点の解明を目指し、各年度において次の作業を並行して行う。

(1)淡路座興行記録の探索、整理／大坂の興行記録とのつき合わせ

淡路座の興行記録を更に充実させる必要があるので、従来の調査に引き続き資料の調査・収集を行う。これまで、淡路人形座、南

あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館、松茂町人形浄瑠璃芝居資料館、兵庫県立歴史博物館の淡路座旧蔵浄瑠璃本調査を行ってきたが、浄瑠璃本には興行記録に準ずる書き込みがなされる場合があるため、番付等の興行記録以外にこうした浄瑠璃本の調査も併せて行う。

(2)淡路座上演テキストの調査／大坂初演テキストとのつき合わせ

作品研究として、まず大坂では伝承されなかったが淡路座において近代まで伝承され、現在浄瑠璃写本も残っている作品を詳細に分析する。『賤ヶ嶽七本槍』『源平八島合戦（弓勢智勇湊）』『東鑑富士の巻狩』『桜姫賤姫桜』『嬢景清八嶋日記』等がそれに当たるが、既にこれまでの研究で一部明らかにしてきたように、こうした作品の中には淡路座において改訂が加えられているものが多い。淡路座上演テキストを大坂初演時の上演テキストとつき合わせることによって、その改訂の実態を明らかにした上で、中央で初演された浄瑠璃が淡路座によって当初どのように取り入れられ、それがどのように改訂され、近代に至っているのかを考察していく。具体的には、まず『賤ヶ嶽七本槍』の成立、上演史について整理する。当該作品の伝承写本整理は、現在この作品の復活上演を視野に入れている現淡路人形座の今後の公演活動にも関わるものである。

併せて、大坂とは別に淡路座がどのような作品を伝承してきたのかを明らかにすることによって、淡路座特有の活動背景を考察し、それが大坂発信の芸能文化といかに関わるのかを検討する。

(3)淡路の座本仲間記録の調査、分析

上村源之丞座の旧蔵資料である引田家資料（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館寄託）の分析を進める。同資料には、淡路座の座本仲間に関わる文書が多く含まれ、そこから淡路座と大坂浄瑠璃界の具体的なやり取りの様子がわかる場合がある。(1)（2)の作業でわかったことと引田家資料所収文書の分析から読み取れる事実とを照らし合わせることによって、淡路座と大坂浄瑠璃界との交流につき、総合的な見通しを立てる。

４．研究成果

「研究の方法」欄に記した(1)～(3)の作業を並行して進め、それぞれ以下の成果を得た。

(1)淡路座興行記録の探索、整理／大坂の興行記録とのつき合わせ

南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館、松茂町人形浄瑠璃芝居資料館、兵庫県立歴史博物館、徳島県立文書館において再調査を行い、これまで精査できていなかった資料の分析を行った。特に松茂町人形浄瑠璃芝居資料館蔵の、目録化されていない浄瑠璃本（淡路座旧蔵写本）を悉皆調査した。加えて、既に収集済みの資料（番付・文書・浄瑠璃本）の整理も適宜進めていった。そしてこれらを進めていく過程で、新たに江戸時代に編纂された淡路島の地誌に着目し、その中に見える淡路座に関する記述の抽出を進めていった結果、新たに重要資料として『淡島歴覧』（東京大学史料編纂所蔵）を見出して、その成果を「『淡島歴覧』の淡路座関連記事」（『演劇研究会会報』第 38 号）としてまとめた。また淡路座と大坂浄瑠璃界との関係がうかがえる資料として、十八世紀後半の浄瑠璃史について記された『浄るり今物語』を見出し、「早稲田大学演劇博物館蔵『浄るり今物語』解題と翻刻」（『文学史研究』第 52 号）としてまとめた。

(2)淡路座上演テキストの調査／大坂初演テキストとのつき合わせ

まず、大坂初演の二作品を取り合わせて成った淡路座の改作『賤ヶ嶽七本槍』の成立時期と作品構成を分析し、「淡路人形座の作品伝承―『賤ヶ嶽七本槍』を例に」として学会発表（日本演劇学会）した。加えて、淡路座による改訂作品に顕著な最終段の増補、及び五段構成への組み替えについて事例の整理を行い、淡路座上演作品の改訂本文のうち、特に「五段目」として残っているものを調査・分析していった。その結果、淡路座が時代物浄瑠璃を上演する際、五段構成の作品ではないものを五段にみなして上演する傾向があること、そして五段目を増補・改訂する場合が多いことを明らかにした。そこで、改めてこうした観点から『賤ヶ嶽七本槍』について再検討し、本作における作品改訂の意味を、作品全体の内容の変化をもとに考察して、最終的に論文「浄瑠璃五段構成の衰微と淡路座」（『文学』第 12 巻第 2 号）にまとめた。

また『賤ヶ嶽七本槍』以外の淡路座上演作品の分析としては、論文にまとめるには至らなかったものの、『淡路人形浄瑠璃元祖上村源之丞座座本 引田家資料』（財団法人淡路人形協会、2011 年）所収の「淡路座上演作品解題」に多くの作品の解題を執筆した（『奥州秀衡有鬢壻』『蛭小島武勇問答』『小田館双生日記』『源平八島合戦（弓勢智勇湊）』『東鑑富士の巻狩』『桜姫賤姫桜』『軍法富士見西行』『嬢景清八島日記』『玉藻前曦袂』『生写朝顔話』『二名島女天神記』『敵討肥後駒下駄』『鹿児島戦争記』『日清戦争記』『倭仮名北清軍記』『日露戦争記』の各項目）。併せて、同書に『朝顔日記』五段目（道行・祝言場）を翻刻し、かつ引田家旧蔵浄瑠璃本目録を編集した（写本を担当）。

(3)淡路の座本仲間記録の調査、分析
上村源之丞座旧蔵引田家文書を精査するに当たり、同文書をもとに大正期に作成された三田村鳶魚稿「淡路阿波人形座旧記襍纂」（早稲田大学演劇博物館蔵）を調査し、両者をつき合わせることによって、「旧記襍纂」の方に一部引田家文書には現存しない記録を見出した。また座本仲間に関する記録ではないが、引田家文書に含まれる『操曲入門口伝巻』を精読し、その筆者である平野安澄について調査した。これらの調査は、上記『淡島歴覧』や『浄るり今物語』を発見する契機となった。そして最終的に、引田家文書や上記『淡島歴覧』所収の座本関連文書等を分析して、論文「新出資料に見る近世淡路座の芝居興行―『淡島歴覧』の市村六之丞座興行記録―」（公開講演・演奏会「淡路人形浄瑠璃と大阪」実施報告）をまとめた。

以上、(1)～(3)の作業を組み合わせて進めることにより、それぞれ一定の成果を得、淡路座と大坂浄瑠璃界の交流について、ある程度の見通しを立てることができた。「研究開始当初の背景」欄に記したように、従来この方面の研究は極めて手薄であったが、その間隙をある程度埋めることができたと考えている。
本研究に取り組むことによって、地方の状況まで含めた、より総合的な人形浄瑠璃史を構築していく上で、その基礎となる極めて重要な知見を獲得した。この成果を土台に、更に広く人形浄瑠璃史に関する諸問題の考察に取り組んでいく所存である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①久堀裕朗、『淡島歴覧』の淡路座関連記事、演劇研究会会報、査読無、38 号、2012、pp.19-35
②久堀裕朗、早稲田大学演劇博物館蔵『浄るり今物語』解題と翻刻、文学史研究、査読有、52 号、2012、pp.64-78
③久堀裕朗、新出資料に見る近世淡路座の芝居興行―『淡島歴覧』の市村六之丞座興行記録―、公開講演・演奏会「淡路人形浄瑠璃と大阪」実施報告、査読無、2012、pp.9-16
④久堀裕朗、浄瑠璃五段構成の衰微と淡路座、文学（岩波書店）、査読無、第 12 巻第 2 号、2011、pp.112-125

〔学会発表〕（計４件）
①久堀裕朗、『淡島歴覧』の淡路座関連記事、演劇研究会、2011 年 12 月 26 日、同志社大学
②久堀裕朗、『伊賀越道中双六』の上演史、第 1 回日中伝統芸能研究交流会、2010 年 10 月 9 日、大阪市立大学
③久堀裕朗、近世後期における淡路人形座と大坂浄瑠璃界、大阪市立大学・上海師範大学共同セミナー、2009 年 12 月 6 日、大阪市立大学
④久堀裕朗、淡路人形座の作品伝承―『賤ヶ嶽七本槍』を例に、日本演劇学会全国大会、2009 年 6 月 27 日、大阪市立大学

〔図書〕（計１件）
①塚田孝、森下徹、八木滋、町田哲、久角健二、三田智子、藤本清二郎、マーレン・エーラス、吉田ゆり子、久堀裕朗、神田由築、清文堂出版、身分的周縁の比較史 法と社会の視点から、2010、pp393-415

６．研究組織
(1)研究代表者
久堀　裕朗（KUBORI　HIROAKI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50335402

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし